古代　大和への鉄の道【2】

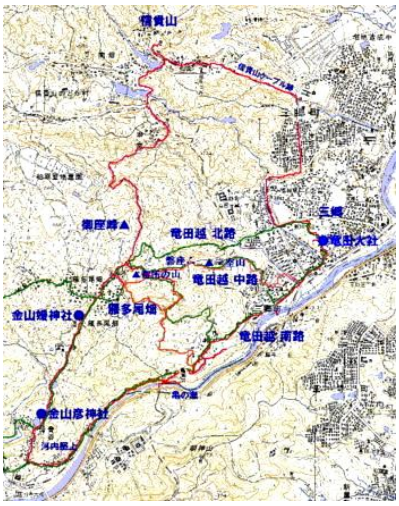
9. 大和川 亀の瀬・龍田越　Country Walk 2007.4.20. & 4.29.

三郷町　大和川土手より　龍田山

大和川　亀の瀬岩

亀の瀬周辺　地滑り防止対策地区

河内と大和の境　大和川　亀の瀬・龍田越



古代　大和への鉄の道【2】大和川　亀の瀬・龍田越　Country Walk

1. 龍田大社から大和川沿い峠集落を経て亀の瀬・河内堅上へ龍田越南路を歩く
   - 1.1. 龍田大社から大和川沿いに峠集落へ
   - 1.2. 亀の瀬・地滑り対策地区にはいって
   - 1.3. 亀の瀬から　河内堅上へ
2. 河内堅上・貴谷から雁多尾畑・御座峰へ　古代製鉄集団の痕跡を訪ねて
   - 2.1. 金山彦神社から　広い明るい谷筋を龍田山の尾根・雁多尾畑集落へ
   - 2.2. 金山媛神社　&　雁多尾畑集落
   - 2.3. 龍田神が降臨した御座峰　周辺で
   - 2.4. 帰路　雁多尾畑・御座峰から信貴山へ
3. 龍田神の道を　三室山から御座峰・留所の山へ　古代たたらの痕跡を捜す

地滑り防止工事地区より　留所の山周辺

この上　留所の山より　地滑りが起きたところ

古代の製鉄集団の住んだ雁多尾畑集落

河内から大和への龍田山　乗越周辺

大阪湾から　古代大和に入るには　紀ノ川・吉野川　大和川　淀川・木津川　のいずれかを遡るルートがある。
前回の淀川・木津川のルートに続き、大和川を遡るルート　大和の入り口　大和川亀の瀬・龍田越を訪ねました。
大阪湾から大和川を遡ると 25km で大和と河内の境 亀の瀬。南北に連なる生駒連山と葛城・金剛連山の割れ目　渓谷をなすここを大和川が急流になって、大和から河内へ流れ下る。古代大阪湾から遡ってきた舟はこの亀の瀬の急流を遡れず、ここで舟を降りて　陸路　渓谷沿いの険しい山越をせねばならない。 竜田越である。
ここを安心して　船で越えられるようになるのは　江戸期　亀の瀬の改修が行われてからという。
また、大和への入り口として、古代には　龍田の関が置かれ、古代の歌人たちが　紅葉を読んだ「竜田川」もこの亀の瀬渓谷から上流の龍田の森あたりまでの大和川と考えられている。
そして　この龍田越の乗越の尾根の上には「雁多尾畑・カリンドバタ」という響きのいい古代からの集落があり、製鉄集団といわれ、この龍田越道は大和への鉄の道だという。

いったい　大和川の難所　亀の瀬とは‥‥
難所を山越えした龍田越とは・・・・

この渓谷を JR 関西線が通り抜け、何度も電車から見ているが、それほど険しい渓谷が続くとは思えない。
でも、実際に歩いてみて　大違い。　やっぱりすごいところでした。
また、単に大和の入り口というだけでなく、「大和への和鉄の道」 そんな痕跡が点々とあり。
名前だけはしっていましたが、ここは日本有数の地滑り地帯　今も地滑りとの戦いが続き、この地滑りがどうも　大和川亀の瀬の難所を形成する一方、 古代たたらの黎明期　鉄鉱石を川に露出させ、製鉄の試みがこの山で行われたのではないか‥‥
その痕跡が　亀の瀬を越えた大和側　三郷の風神　龍田大社　河内側雁多尾畑集落ではないか・・・・
行って見てはじめて知った「亀の瀬」のすごさでした。

亀の瀬岩周辺を描いた江戸時代の絵図

亀の瀬岩

亀の瀬岩周辺の激流

亀 の 瀬　　後方　渓谷に沿って国道・関西線が走る　2007.4.20.

三郷町　大和川土手より　龍田山

雁多尾畑の尾根の頂周辺より南東河内側の遠望

風神　龍田大社

【河内と大和を結ぶ古道　龍田越古道　龍田大社を起点に龍田山を河内に越える 3 つの道があったといわれている　**】**

◎龍田越北路、信貴山参詣道から御座峰・雁多尾畑へ
龍田大社～今井集落～御座峰（３１２ｍ）～雁多尾畑～上徳谷～横尾～生津～安堂へ、
雁多尾畑～貴谷～高井田へ
(信貴山へは御座峰～本堂～信貴山)
◎龍田越中路は、三室山稜線道から御座峰・雁多尾畑へ
龍田大社～高山～三室山～稜線道～留所山（２７６ｍ）～御座峰～雁多尾畑～上徳谷～横尾～生津～安堂へ
雁多尾畑～貴谷～高井田へ
◎龍田越南道は、亀の瀬渓谷沿いの高巻き道
龍田大社～高山～峠～亀の瀬地すべり地～貴谷～高井田へ
峠～雁多尾畑～貴谷～高井田へ

参 考　　リンクアドレスの上に変更後の新アドレスが隠れています

1. **古代大和の鉄の道を訪ねて【1】 淀川・木津川から大和へ　大和の外港　木津「泉津」を訪ねて**
   http://mutsu-nakanishi2.web.infoseek.co.jp/iron3/7ironpdf
2. **「鉄の 5,6 世紀」大和の日本統一を支えた大県製鉄遺跡　北河内の大規模専業鍛冶工房　大県製鉄遺跡探訪**
   http://mutsu-nakanishi.web.infoseek.co.jp/iron/4iron12.pdf

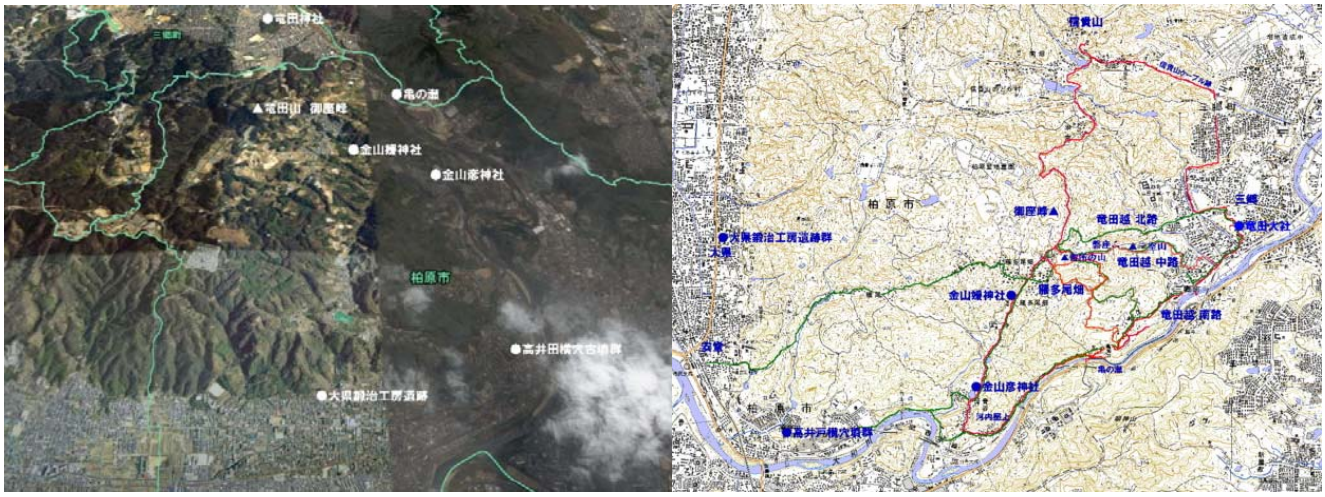
1. 龍田大社から大和川沿いに峠集落を経て亀の瀬・河内堅上へ

龍 田 越 南 路 を 歩 く　　2007.4.20.

奈良県三郷町　大和川より、龍田山　&　大和川　亀の瀬の急流

◎龍田越北路、信貴山参詣道から御座峰・雁多尾畑へ
龍田大社～今井集落～御座峰（３１２ｍ）～雁多尾畑～上徳谷～横尾～生津～安堂へ、
雁多尾畑～貴谷～高井田へ
（信貴山へは御座峰～本堂～信貴山）
◎龍田越中路は、三室山稜線道から御座峰・雁多尾畑へ
龍田大社～高山～三室山～稜線道～留所山（２７６ｍ）～御座峰～雁多尾畑～上徳谷～横尾～生津～安堂へ
雁多尾畑～貴谷～高井田へ
◎龍田越南道は、亀の瀬渓谷沿いの高巻き道
龍田大社～高山～峠～亀の瀬地すべり地～貴谷～高井田へ
峠～雁多尾畑～貴谷～高井田へ

【　**龍田越古道**　龍田大社を起点に３つの道があったといわれている　】



河内と大和の境　亀の瀬･龍田山周辺　龍田越　　鳥瞰写真とルート図

の瀬の急流をみると､まず　舟ではこえられず、手前で降りて、亀の瀬をこえねばならない。
そのルートは３路あったといわれているが、地すべり地帯を通り抜けねばならず、色々変化していたと考えられる。
古代　初期のルートとしては　亀の瀬の渓谷に沿って龍田山裾を越える道が一番だろう。しかし、亀の瀬　周辺が閉ざされたときには　河内側からも　大和側からも　亀の瀬まで船ではいらず、陸路　御座峰を越えるルートが使われたとかんがえられるが、いずれにしろ　厳しい山道を越えねばならなかった。

河内と大和の境　　亀の瀬の衛星鳥瞰写真　　大和側より
中央が亀の瀬　その右側　亀の瀬地滑り防止対策地

1. 1.　龍田大社から大和川沿いに峠集落へ

a.　風神　龍田大社　　龍田越の大和側の出発点　風の神を祭る龍田神社

龍田大社　朱塗りの大鳥居　と　入り口鳥居周辺の杜

大和川　亀の瀬は南に葛城・金剛　北に生駒山地に挟まれた狭い渓谷　大阪湾・河内平野からの風がこの渓谷を吹き抜ける 古代製鉄に必須の風がある　　古代の製鉄集団が　この地で　製鉄を始めた由縁であろう
河内側から亀の瀬の渓谷を抜け大和に入ったところに風の宮　龍田大社がある。朱塗りの鳥居が森の新緑に映えて美しい。 JR 関西線　三郷駅からすぐの場所である。
大和川の難所　亀の瀬を避けて　ここから　龍田の山を越えて　河内側へでる龍田古道の起点である。
祭神は「天御柱神、国御柱神」天地の大気・生気・風力を司る「風神」。御神名の”御柱”とは「天地万物の中心の柱」と解釈され、別名の”志那都”とは《息長》の意味で「気息の長く遠く吹き亘る」と解釈。

天地宇宙の万物生成の中心となる『気』すなわち＜空気＞或いは風の神様で、五穀豊穣など幅広く御神徳のある神様。(龍田風神祭祝詞)

崇神天皇のとき、五穀凶作が続いたので、天皇が悩み、夢にこの神が現われお告げがあったので創祀したとあり、日本書紀には、天武４年（６７５）に風神を竜田の地に祭るとあり、持統天皇譲位の持統１１年（６９７）まで毎年４月と７月に祭りを行ったとある。

(竜田大社由緒略記ほかより)

三郷駅の東南　大和川より 三室山 & 龍田山

(左:留所の山　&　右: 御座峰)

そして、龍田大社の背後の龍田山の御座峰があり、龍田神が降臨した聖地とされている。
宮司さんから丁寧に龍田大社の由緒や御座峰などについて教えてもらった。

河内と大和を隔てて南北に伸びる金剛・葛城山地と生駒山地がこの地で　途切れて大和川が流れくだり、大阪湾からの風の吹き上げ口である。近江・美濃の境の伊吹山も同じ風の通り道。
この龍田山か北に伸びる生駒山地は古代の大製鉄地帯。河内側の生駒山地の南端　大県には大鍛治工房があり、御座峰から河内側に尾根を越えた雁多尾畑集落へと続く竜田越古道の谷筋には金山彦、金山姫の命が祀られている。風神は製鉄の為にはなくてはならない強風の吹くことを祈る神。それが、農業の守護神として風を鎮める神へと時代と共に変遷して行ったのかもしれない。

龍田の神　風神と古代製鉄とつながる伝承がないかと宮司さんにもお聞きしましたが、特にはないとののことでした。　また、この地は瀬戸内から大和への侵入の最後の拠点であるとも言え、天武天皇の時代に竜田の関が設けられ、日本四関の一つとされる。このようにこの地は大和にとって　最重要地であり、その守り神が龍田大社であったといえる。　　生駒山裾のもう少し東側の斑鳩町を北から南に大和川に流れ込む「龍田川」があるが、どうも万葉集に歌われる有名な「龍田川」は亀の瀬からこの龍田大社あたりの大和川のことらしい。　異説もあるが、僕にはこの方がピンと来る。

b. 龍田大社から大和川沿いに峠集落へ

JR 関西線　亀の瀬 - 三郷間　車窓より　　2007. 4. 20.

亀の瀬の渓谷をぬけると視界がひろがり、左手に龍田の山なみを眺めながら

菜の花が土手に美しい鉄橋をわたると三郷の駅

JR 三郷駅のすぐ西周辺は磐瀬の杜　古代　大和の守り　龍田の関が置かれたところ

駅の北西側の龍田大社から、JR 三郷駅の前に戻り、そこから西へ JR の線路と大和川に沿って西へ 50 メートルほどのところに磐瀬の杜の碑がある小さな公園がある。
このあたり、古代には　磐瀬の杜と呼ばれ、龍田の関が置かれたところである。　このあたりまで、龍田の森が広がり、河の対岸には葛城・二上山の山裾が大和川に切れ落ち、右手には龍田・三室の山が迫り、その間を渓谷となって大和川が河内へ流れ下って行く。
古代　この亀の瀬の急流を船で越えることができないので、この渓谷を避けて、ここから、龍田山を越えて河内へ向かった。

龍田越南路　Walk ルート図

　河内から来た人たちも龍田山を越えて、このあたり、磐瀬の杜でほっと一息をつき、龍田大社に参って　それから大和の国にはいっていったに違いない。山が低いといえども　馬が入ってくる５世紀までは陸路も大変だったと思う。また、時代が下ると、この渓谷の亀の瀬のごく近くまで入り、亀の瀬岩を始め、急流の中に岩が立ちはだかる亀の瀬だけを陸路で　船を乗り換えることも行われている。　いずれにせよ　河内 - 大和の重要な交通路の難所である。また、この亀の瀬の難所は逆に大和を守るとりでであり、大和王権成立後　ここに龍田の関が設けられている。

大正橋周辺　大和川が亀の瀬の渓谷にかかるところ

　ここから土手に沿って、さらに５０メートルほどの行くと北西に街中を三室山への道とそのまま川沿いの道とに分かれる。
広い国道と JR の線路はこの先で、大和川を渡って対岸を大和川沿いに狭い亀の瀬の渓谷の中を抜けてゆく。
　この亀の瀬渓谷は日本有数の地滑り地帯で　JR の線路も当初はこちら側龍田山の山裾にへばりつきながら亀の瀬の谷を抜けていったのが、地滑りで対岸を迂回するルートに付け替えられたと

JR 三郷駅のすぐ西側に　磐瀬の杜の碑があった　2007.4.20.

古代には　龍田の杜がこのあたり大和川周辺まで広がっていたという

いう。
大和川の土手には菜の花が満開で、山の新緑　川の流れとあいまって　美しい里山の郷の景色を造っている。
右手にはどっしりと龍田山。

大和川沿い国道へ出る道と三室山・龍田大社へのＹ字路にある道標には墓石が使われていて、ビックリする。
菜の花　満開の大和川の土手の脇に置かれた大和川の標識には河口から 25km 。　案外近いのに驚き

地図を片手にいわゆる古代竜田越　南路のルートを歩く。今回の主眼は　まず　亀の瀬の急流がどんなところかを確かめるのが、まず第一。　龍田大社で宮司さんからも進められたが、三室山を
登ってゆくルートを取らず、大和川と龍田山の山裾の崖の上をまっすぐ亀の瀬へ向かうルートを歩く。

三郷町　大正橋周辺より　亀の瀬・龍田山を眺める　（写真合成）　2007. 4. 20.

龍田の山　　左　留所の山　　右　御座峰　　JP 高山鉄橋から三郷・大和方面　　2007.4.20.
JR 高山鉄橋周辺から　三室・龍田の山を眺める　春真只中　淡い緑の野山の中　菜の花の黄色が目にしみる

c.　亀の瀬の渓谷　龍田山の山腹にへばりつく峠集落　周辺

大和川　亀の瀬に行くには　龍田山の麓から　対岸の国道を大和川沿いに渓谷をゆくか、この地高山から、龍田山の山裾の崖の上　峠集落に出て、急な坂を下って亀の瀬の川岸に出るしかない。　崖下の渓谷沿いには道がない。
JR 三郷駅の西　北側の龍田山・三室山山裾の集落　高山から、川から離れ、龍田山の山裾の高巻きの坂道をのぼると峠集落の八幡様の前にでる。
集落と言っても　細い道沿いに　十数軒の家がぽつぽつとあるだけの静かな里である。　都会の喧騒はすべて対岸にいっていて、車はほとんど走らず、右手に亀の瀬渓谷　左手に龍田山の斜面がなだらかな高台になって広がり、山野草が咲き乱れ、春の自然が広がる素晴らしい景色である。

峠集落の峠八幡神社　2007.4.20.

峠集落への道

峠集落で　2007. 4. 20.

山野草が咲く向うで地滑りを止める工事

果樹園の広がる集落の上に龍田山・留所の山が見える

でも　この地形はどうも地滑りで得られた地形らしく、今も地すべり防止の格闘が続いていた。後で、亀の瀬の地滑り対策地帯に言ってはじめて知ったのですが、年月をかけたすごい大工事で、ここの地滑り防止の格闘が続いていました。

また、ここから、龍田山の頂上部へ急な斜面をジグザクに登ってゆく道も見え、昔はこの峠の八幡様の前から山の頂、御座所の峰に上り、山越えて　雁多尾畑の集落から河内へ越えてゆく道があったようだ。
峠の集落の崖の縁に行って　大和川の渓谷を覗き込む。垂直に近く深く切れ落ちていて、対岸を行く国道のトラックや JR のでんしゃが小さい。
これはきつい。　こちら側に道は付けられないと納得するが、急流の大和川も良く見えず、亀の瀬の流れも良くわからない。
この切れ込みは中途半端ではない。

峠集落から亀が瀬への道

でも　まだ、この集落の中にいる時には　地滑りが昔あったところ程度の軽い気持ちでしたが、亀の瀬の川に下りるため、すぐ西の地滑り防止地帯に入って、そのすごい地滑り対策工事がびっくりしました。

峠集落から　急な崖下の亀が瀬　を眺める　2007.4.20.

峠集落は龍田山が　亀の瀬渓谷に落ちる南斜面中腹で、地滑り地帯の中にある。
大規模な地滑り地帯の真只中　大規模な防止工事が続く
この亀の瀬で、地滑りが起きて　大和川に土砂が滑り落ちると　大阪・大和への大動脈が止まるだけでなく、川がせき止められ、
大和・河内の平野が水没??するかも???

1. 2.　亀の瀬・地滑り対策地区にはいって

亀の瀬 地滑り防止対策工事地域

龍田山の山腹にへばりついて　大和川に沿って狭い帯状に広がる峠集落を抜けると地滑り防止対策工事が延々と続いている亀の瀬地滑り対策地区。 見上げる上に電波塔のある龍田山　留所の山が見え、その頂上部からすっぽり山崩れがしたのだろう。

まるで日本アルプスに残る氷河の削り跡のごとく　すり鉢底状のカール地形になっていて、その地下には数々の現代の技術を駆使した地滑り対策工事の諸施設が埋め込まれている。　この地下には　水抜きパイプが埋め込まれ、大きな円形集水井戸と水抜き水路と共に、地下にある地滑り面を貫く１００メートルもの深さに直径６．５メートルのコンクリート円柱が何本も建設されている（深礎工法）という。

突如として現れたすり鉢状の草原に唖然とする。

亀の瀬　地滑り地帯と地滑り防止対策工事の概略図

亀の瀬の急流をみると、まず　舟ではこえられず、手前で降りて、亀の瀬をこえねばならない。
そのルートは 3 路あったといわれているが、地すべり地帯を通り抜けねばならず、色々変化していたと考えられる。古代　初期のルートとしては　亀の瀬の渓谷に沿って龍田山裾を越える道が一番だろう。
しかし、亀の瀬　周辺が閉ざされたときには　河内側からも　大和側からも　亀の瀬まで船ではいらず、陸路　御座峰を越えるルートが使われたとかんがえられるが、いずれにしろ　厳しい山道を越えねばならなかった。
　この見上げるすり鉢状の地形を登るのにも魅力がありますが、今日はまず、「亀の瀬」の急流へ。
このカール地形の中心部に入らず、底のところから、急斜面に諸工事のために付けられた舗装道路を大和川亀の瀬へ降りてゆく。 地下に埋め込まれた集水井戸の丸い屋根の向うに大和川　その川の真ん中に亀の瀬岩が見える。
　ここが大和と河内を隔てる難所　亀の瀬。
　流れが、あわだっているが、以外にも上流側も下流側も想像していたよりも静かな流れである。そして、狭い渓谷　川にへばりついて、国道と JR の電車がここを抜けてゆく。　狭い渓谷が続いている。
何度も地滑りを起こして　大和川が埋まった。ふっと大和の地図が頭をよぎる。
ここで　大和川がせき止められると大和は湖。そして　かつて　河内湖だった標高の低い河内も堰が切れるとすごいことになる。　交通の要衝というだけでなく　現在も　近畿の息の根が止まってしまう。
今も地滑り防止の大工事がつづく理由だろう。
いつも　地滑り工事やっているなあ　ぐらいで、まったく　知りませんでした。

a. 亀 の 瀬　　大規模地滑り防止工事が続く急斜面を降りて

地滑り防止　集水井の上から　亀瀬岩を眺める

深礎工　工事現場を見上げる

亀の瀬周辺　　20074. 20.

とにかく　亀の瀬の川まで降りてみようと集水井戸の横の急な階段を川の端まで下りてゆく。　川の端に小さな踏み跡がかわにそってあるので、これを行けば　亀の瀬岩のところまで降りられそう。　途中でふみ後もなくなりますが、木々の間から　河原が見えているので、降りられそうなところを捜して河原へ降りる。

亀岩のすぐ下側　川が逆く「く」の字になっている小さな浜で　亀の瀬岩のすぐ横にまで近づける。

「ざあ　ざあ」と瀬の音が心地よい。　上から見るのとは大違い　すごい流れ。　上流側から段になって　下流側に水が噴出しているといったような流れ。

「ここは越えられない」　納得である。

亀の瀬岩周辺　　左　下流側　右　上流側　　下流側は水深が深いが、上流側は浅い。　　2007. 4. 20.

河原には　わずかですが、砂鉄が堆積。踏み跡の途中でも見つけた赤茶けた赤鉄鉱状の石もある。

ひょっとして　川にさてつがあるのではないか・・・と少しは期待していたのですが、なんともいえないわずかの量ですが、見つけられて満足。

河内側にある古代の大製鉄地帯　大県や　これから河内側から登ってゆく龍田山「雁多尾畑」や大和側　葛城山麓「忍海」を支えたのはこのあたりの鉄ではないかと　ふっと頭をよぎる。

逆「く」の字に曲がって流れる亀の瀬　2007. 4. 20.

崖道を降りると小さな浜　砂鉄が少しと赤い鉄分交じりの石がゴロゴロ

やっぱり　この山間には「風」だけでなく、「鉄」もある

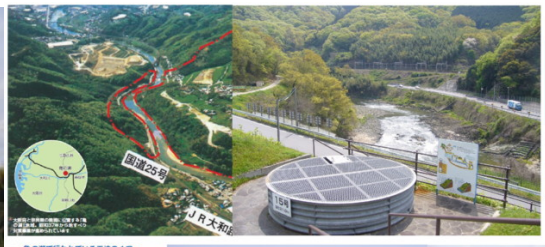
いつも電車でとおり抜ける亀の瀬　電車から見るイメージと本などで読む亀の瀬の難所の間にイメージの差があって、古代も　ひょっとして　亀の瀬は舟で遡れるのでは･･･???とも　また、急流がもっと続いているとも　思ってやってきましたが、実際は亀の瀬のごく　短い区間が、急流の難所。

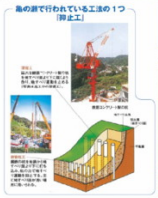
川中に岩が沢山落ち込んでいて、大きな亀岩が川の真ん中に居座り、ここで極度に川が狭まり、丁度堰のようになっていて、上流側と下流側で段差になっている岩の間を急流が駆け下る。　この段差や岩が昔はもっと続いていたのでしょうが・・・・・。　この急流は　古代　船で行き来するのは無理。

でも　区間が短いので、絵図にあるように人や荷物を上・下流の船に移し変えて　川を行き来するか　龍田山を陸路山越えするしかないだろう。
ほんの短い区間のみに岩がゴロゴロしていてるので、おそらく、今も続く龍田の山の地滑りが昔々この谷で起こって　大和川に大岩が転げ落ちた産物なのだろう。地滑り地帯のすごさです。
また、亀瀬岩周辺は　通行可能にするため、何度か大規模な工事がされているが、実際に亀瀬岩を越えて　通過できるようになるのは江戸時代以降したがって、昔はもっと岩も大きく　荒々しい渓谷だったと想像される
また、この地まで大阪湾から約 25km その近さにもびっくりです。

「亀の瀬と古代製鉄との関連」について　後で聞いたり見たことを別途まとめますが、　川に下りると亀の瀬岩のすぐ下の砂浜に少しですが、砂鉄が堆積。　また　周辺には鉄分を含んだ赤い鉄分を含んだ石がありました。　すぐ上の地滑り防止対策地帯の真ん中に集められたこの周辺から掘り出された石の中に　磁石に反応する岩石があり、また、この龍田山の地下には今も鉄の鉱脈があるとも柏原歴史資料館で聞き着ました。
この崩れの中に鉄鉱石の鉱脈があって、それが川に落ちて、この龍田山周辺を古代大和　黎明の時代の製鉄地帯にしたのではないか・・・・　などと根拠はありませんが考え始めています。あまり期待していなかった龍田山・亀の瀬での　古代たたらとの出会いでもありました。

b.　すごい　亀の瀬の地滑り対策工事





亀の瀬の急流をみると、まず　舟ではこえられないだろう。手前で降りて、亀の瀬をこえねばならない。
現在の川では、　亀の瀬のごく短い区間を除けば、すぐ近くまで、渓谷沿いにやって来て、船を乗り換えるのが、一番楽であるがこの地帯は地滑り地帯。　古代には　絶えず　谷の状況が変化し、川筋そのものも　もっと険しかったと考えられ、地滑り地帯を避けながら　龍田山を越えねばならなかったのだろう。
陸路　御座峰を越える龍田越のルートが使われたと考えられるが、いずれにしろ　厳しい山道を越えねばならなかった。

1.3.　亀の瀬から　大和川に沿って　河内堅上へ

大橋をわたらず、そのまま龍田山側の崖の上にでると山と川との間の狭い崖の上に亀の瀬の集落が続く。ここには昭和初期旧関西線の線路がつづいていたが、亀の瀬の地滑りによって、対岸に線路が移って、今はその線路跡が生活道路になって河内堅上の方に続いている。　関西線がまた　こちら側に移ってくるとまもなく河内堅上。
亀の瀬から約３０分ほど　緩やかな大和川の流れを眺めながらの walk 道端には春の野草が咲いて　気持ちのいい walk でした。

地滑りで今は対岸を走る JR の旧線路跡が生活道路となって　その狭い道の両側に数戸　家が並ぶ亀の瀬の集落

亀の瀬の南側でまた線路がこちらに戻ってくる　亀の瀬から河内堅上駅へ　大和川を眺めながらのハイキング

亀の瀬から河内堅上駅へ　ハイキング

山と川に挟まれた狭い田圃に咲いていた野草の花　2007.4.20.

2.　河内堅上・青谷から雁多尾畑・御座峰へ
古代製鉄集団の痕跡を訪ねて

河内堅上から大和川沿いの高台を国分へ下る。そのまま大和川沿いを下れば高井田・河内平野へ出る。
今日はそのままくだらず、尾根を回り込んで青谷集落から雁多尾畑・御座峰へと一つ東の谷筋を北へ龍田山を登りなおす。この谷には金山彦神社・金山媛神社があり、上り詰めた尾根の上が雁多尾畑の集落で　そのすぐ上に御座峰がある。

河内堅上駅

河内堅上から青谷の集落へ

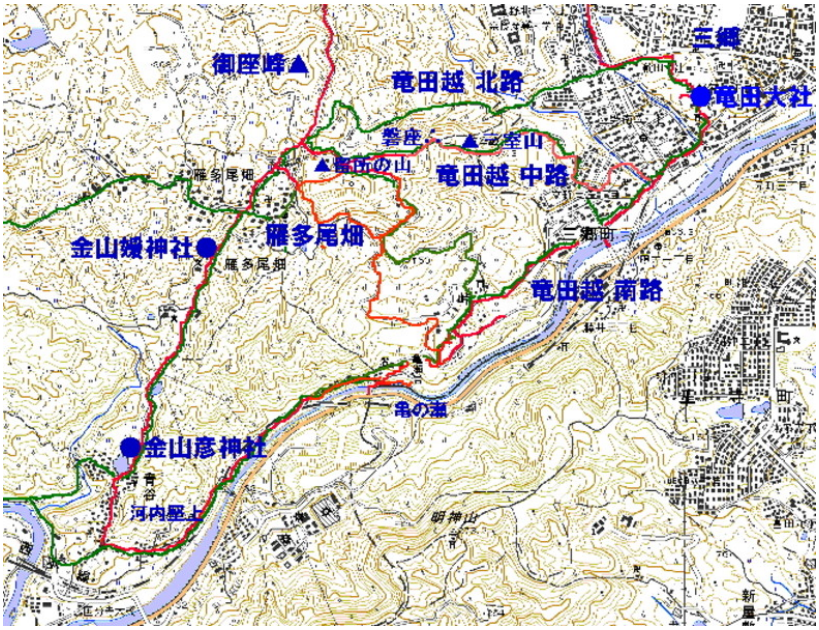
「雁多尾畑」とは「狩人」がなまったもので、古来　山を駆け巡った金属精錬の集団を指すとの説があり、生駒山地・龍田山周辺の鉄鉱石をつかって、製鉄を営んだ集団の村が雁多尾畑といわれる。
もともと、この谷筋のすぐ北側の山裾大県にいた大製鉄鍛治集団がこの谷の尾根の上に移動して行ったともいわれ、この谷筋に彼らの守り神　鍛治神「金山彦・金山媛」を祭った。
古代製鉄集団の谷である。

古代製鉄集団の集落といわれる雁多尾畑
河内平野が遠望できる

現在谷筋にある金山彦神社・金山媛神社ももともとはもっと上の尾根の上にあったといわれ、「風神　龍田神」が降臨した御座峰と重なる。
大阪湾・河内平野からの風がこの谷を吹き上がり、この風を利用して、製鉄・鍛治を行い、頂上・御座峰に彼らの神を祭ったのだろう。
そして、この御座峰から大和側へは、御座峰に降臨した龍田神が大和側　龍田大社へ下って行った「神の道」がつづく。
このルートが　「最初の龍田越」　そして　古代　大和王権を支えた「大和の鉄の道」重要路かもしれない。

大陸・朝鮮半島の鉄の大和への供給ルートとしての「大和の鉄の道」を考えてきましたが、ここでは　それらの鉄を鍛治加工して、大和に持ち込む鉄器生産鍛治の道でもあった。
まだ　しっかりと確認はされていないが、早くから渡来人を受け入れ、生駒・龍田の山の鉄鉱石を用いて、製鉄までもこの集団が行っていたかも知れぬ。
古代　初期の頃　河内から大和へ出るには　険しい難所「亀の瀬」大和川を遡るよりも　この龍田山越・竜田越の道が本道だったのかも知れぬ

2007.3.15.　青谷の集落の中を歩きながら



狭い谷筋に裕福な村と感じる大きな屋敷が細い街道に密集している青谷の集落　　2007.3.15.

2.1. 金山彦神社から　広い明るい谷筋を　龍田山の尾根・雁多尾畑集落へ

家々が密集した青谷の集落をぬけ、谷筋を雁多尾畑に上ってゆく、広い道路にぶち当たる。この道の端に池があり、鳥居が見える。　ここからは家並が途切れ、木々につつまれた坂道が奥に続いている。ここが　金山彦神社。鳥居の傍に神社の概略を記した案内板があり、この地古代製鉄との関係などや、もともと　龍田山･嶽山に神社があったことなどが略記されている。

谷の上り道の両側にびっしり建て込む青谷集落をぬけると池之端に金山彦神社がある　2007.4.20

この鳥居の傍に人が集まっていて、この奥の保育所や小中中学校から子供たちが帰ってくるバスを待っているのだと。ここから奥　雁多尾畑まで集落もなく、人もいないところに・・・と思いましたが、この雁尾畑へ登ってゆく谷筋は竪上のメイン道路。　神社の杜を抜けると派出所もあり、広い谷筋に段々畑田畑が広がる丘陵地の上の方に学校の建物が建っていました。振り返ると随分高くまで、登ってきたことが解る。
遠く河内平野が遠望され、足元に広がる田圃にはレンゲの花が満開でした。

朝　歩いた峠の集落や竪上までの大和川沿いの道を含め、春の里山がこんなにきれいとは‥‥
あらためてびっくり。もっとも　この龍田山周辺はまったく　道標がなく　地図をちゃんともっていないと　とんでもないところに行きそうですが、ひともおらず、春の里山の景色を独り占め。

金山彦神社を抜けて　さらに奥につめると正面に龍田山の尾根が見え、
山の丘陵地に果樹園が広がる　田圃には蓮華の花が素晴らしい　　2007. 4. 20.

竪上の田圃にひろがる蓮華畑　　龍田越　青谷-雁多尾畑　　2007. 4. 20.

登りのきつい傾斜道を里山の景色を楽しみながら、中学校　そして次に小学校・保育所などをながめながら登ってゆく。 大和川まで下った国分からも　このかなり奥の小学校まで通うというから、驚きである。

　もっとも　通学バスがあって、さっきの金山彦神社のところで降りて、みんな学校まで登ってくるという。小学校の横を過ぎるといっぺんに谷が細くなって　峠道　いよいよ　龍田山の尾根の上へと登ってゆく。

　雁多尾畑の集落はこの尾根の上からこちら側　南西斜面に広がる集落で、曲がりくねって　登ってゆく峠道が見える。

2. 2.　金山媛神社　&　雁多尾畑集落

少し登ったところ　左手の山腹　石垣の上に神社が見えるのが、金山媛神社。 雁尾多尾畑の集落の入り口である。 金山彦神社と同じ神社略記が書かれていて、二つの神社とも同じ由来を持っている。

宮司さんも同じという。 境内で掃除をしているおばさんに「鉄」の話を言うと　宮司さんがこのあたりで　出た「古い鉄」を持っておられることを教えてもらった。

谷の一番奥　雁多尾畑の集落への入り口

集落へ上り詰める手前の尾根の山腹にある金山媛神社　2007. 4. 20.

谷の一番奥　雁多尾畑の集落への入り口　　金山媛神社　2007. 4. 20.

金山媛神社のところから急坂を上り詰めれば　雁多尾畑の集落である

雁多尾畑集落の広がる谷　　背後は河内平野　　雁多尾畑の集落の上の龍田山の尾根より　　2007. 4. 20.

雁多尾畑集落　街中　　2007. 4. 20.

左手　南より　雁多尾畑の集落を抜け尾根の頂上部に登りきった十字路

正面の石垣の上の峰が御座峰と後で知れる

宮司さんに電話してあげるとの話をお断りして、坂道を登ると坂道の両側にびっしり広がる雁多尾畑の集落。
こんなに大きな集落が　こんな山の中にあるのかと　ビックリである。
とにかく　集落の中を抜けて　尾根筋の頂上にあがり、御座峰を捜したい。日の昼　人もまったく歩いていない。ひっそりと集落は静まり返っている。
標識がなく、また　ハイキングマップもなく、インターネットからダウンロードした２万５０００分の一の地図だけが頼りであるが、よくわからない。
　とにかく　集落で色々教えてもらいながら、上へ　上へと尾根の頂上を目指して　集落の中を抜けてゆくと程なく頂上部の十字路。 十字路のところ　北西角に石垣がありその上に登ると周囲が良く見える。
南には今上ってきた雁多尾畑の集落の谷筋から河内平野が遠望され、東には　葛城・金剛の山並みが重なって見える。
雁多尾畑を登ってきた道はまっすぐ北へそのまま尾根筋の北側の斜面　大和側を信貴山を経て三郷へ続いている。
十字路を東に折れると朝　歩いた亀の瀬・峠集落へ行く道。下から見上げた電波塔のある留所の山のすぐ横をまっすぐ東へ下って行く。　西へ行くと尾根の南側河内側の斜面を尾根に沿って、信貴山・高安山の方へ続いている。
　でも　御座峰の位置がわからない。地図から言うと　今たっている石垣のすぐ北側あたりなのですが・・・・・北への道　すぐそこに人影が見えるので、御座峰をたずねに行く

【尾根を登りきった頂上部の十字路からの展望】

南東側　　河内平野　　左後方に二上山・葛城山・金剛山が重なって見える　　2007.4.2.

東側　　留所の山

南側　　河内平野　遠望

雁多尾畑を抜けて尾根の上、御座峰の周辺からの展望　　2007.4.20.

雁多尾畑から留所の山の端のところを左へ尾根筋をまっすぐ亀が瀬へ下って行く道が伸びている。
雁多尾畑から　亀の瀬・峠集落へ下って行く龍田山越の古道が見える。

2. 3.　龍田神が降臨した御座峰　周辺で

御座峰の周辺より　大和平野が広がる南東側

前方の斜面にぶどう畑が広がり、左後方より　右中央へ大和川が流れ下る　　2007. 4. 20.

北への尾根筋道に人影を見つけて　北へ登ってゆく。　すぐ右手に小さな小屋があり、そこの人だ。
ちょっと　登るとすぐ東側から北へ　大和平野の大パノラマが広がり、崖下の斜面には広大なブドウ畑が続いている。小屋のところがガレージになっていて、いい展望所。
御座峰の位置確かめるよりも　大和平野の大パノラマに見とれる。　纏向の古墳群から三輪山　そして　大和三山もくっきりと見える。
ふっと見ると　子供の猪が檻に飼われている。小屋は下に広がるぶどう園の管理小屋で　出てきた爺さんがウリ坊を捕まえて育てているのだといい、ここの景色は見飽きないだろうと自慢する。
「特に夜大和平野に灯がともると本当に見とれる」と。
本当に大和全体が遠望できる素晴らしい場所である。
「ところで　御座峰てどこ。　また　昔の鉄の話きいたことありませんか・・・」と聞くと道の反対側の小さな丘が御座峰だという。

御座峰の登り口　中央樹木のところから右へ
10 メートルほど入ったところが、御座峰の頂。

また、　「このあたりは　畑などから鉄がでて　自分も見つけたことあるよ。御座峰のしゅうへんもあるかも・・・・。　先日も孫がこの龍田山の古道を訪ねるハイクにいって、鉄見つけてきたよ」という。「でも　この下の古道は荒れていて　どこがとうなっているか　わからんし、どこで孫がみつけてきたのかも知らん」という。
ほんとかいな・・・・・と半信半疑ながらありうると。
よし、鉄滓が転がっているかもしれん・・・と　御座峰へ
御座峰の上り口の小道をほんの 50m ばかり、あがったところが、御座峰。
雑木を刈り込んだ小さなスペースに「御座峰」の碑が立っている。 ほんの小さなこぶの頂で、何もなし。

龍田大社の祭神　風神「龍田神」が降臨した御座峰　　雑木の頂上部　ここだけが刈り込まれていました

河内側から北東へ雁多尾畑の集落を抜け、　尾根の上に出た道が、そのまま尾根の東側を北へ信貴山を経て大和側の三郷へくだってゆく。 尾根の上に出たところで東から登ってきた亀の瀬・三室山からの道とクロスする十字路から北東に延びる尾根すぐの小さなピークが御座峰。十字路から 100mほど北に行った左手の上がり口をまっすぐ 50m ほど登ったところが御座峰
雑木を刈り込んだ小さなスペースに「御座峰」の碑が立っていました。

北東側　大和平野が一望

南東側　葛城・金剛の山が重なって見える

「風神　龍田神」が降臨した御座峰からの眺望

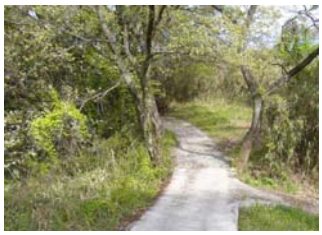
集落の人によると　ここに　たたら場があったという人もいて、　地面に磁石をはわせたり、目を凝らせて　鉄滓がないか　見ましたが　ありませんでした。
でも　この御座峰は　南に河内平野　北に大和平野を見渡せる頂「風神　龍田神」が降臨したところ。
河内平野から雁多尾畑の谷を吹き上げる風の頂上部で、周辺には豊富な山の木々があり、亀の瀬の谷には捜し求めていた鉄原料がある。
ここで、渡来人たちといっしょになって　古代の製鉄を試みたとしても不思議でない。
時代は定かでないが、この周辺で見つかるという鉄滓の存在はたたら製鉄がこの周辺で行われていたことを物語る。

製鉄遺跡や製鉄炉跡をみたわけではありませんが、亀が瀬の地滑りがもたらす鉄鉱石　雁多尾畑の谷の製鉄集団　そして　この谷を吹きあがる風とその頂上に位置する風神　龍田神の御座峰　そして　雁多尾畑で聞く数々の鉄の話。大和への南からの入り口　ここにも　確かに製鉄集団がいて、日本誕生黎明期の古代　日本誕生をささえたのでは　ないでしょうか・・・・。

●　御座峰から東側　急斜面を段々にして　関西では有名な　雁多尾畑のブドウ畑が広がっている

御座峰の東斜面の下が峠集落　そして　亀が瀬の地滑り地帯である。
この斜面に広がるブドウ畑への道がいくつもあり、立派な道がついているが、 いずれも麓までは通じていない。自分たちの果樹園までである。これも　地滑り地帯のすごさか･･･
どうも　広がるぶどう畑は　雁多尾畑の人たちの所有で　下へ下る道は必要でなかったようである。

鉄滓が落ちているかも知れぬと聞いて　この中に入り込んで　下ってゆけば、どこかで、三郷から御座峰への古道　南路・中路どれかの道に出れると思いましたが、ここもやっぱり、カール状。隣の方へはトラバースできず、まったくのはずれ。道標がまったくないので、迷路。下まで降りられそうで、結局　降りられませんでした。



ぶどう畑が広がる御座峰東側　急斜面の中に入り込んで、　　2007.4.20.

雁多尾畑の集落を抜けて尾根上り詰めたところで　そのままま っすぐ尾根筋を北東へ行くと御座峰。
東へ下ると亀の瀬へ下りてゆく道。　この亀の瀬に下る道を１００ｍほど留所の峰の横まで行って、そのまま下らず、北から伸びてくる枝尾根筋を降りるのが、古道龍田越中路であることが、後でわかりました。
　御座峰へ行く途中に古い道標があるところから古道に入れると思ったのですが、この古道龍田越　南路はどうも　雁多尾畑の人たちが、自分たちの畑・果樹園までの道を整備していて、それよりも下側は畑が荒れて消えてしまっている。
今回の walk は　河内から大和へ入る入口　大和川・亀の瀬がどんなところなのかを見るのが主。
竜田越のルートを確認するつもりで、雁尾畑の山越をしたのですが、この龍田山の河内側の麓　大県が古代山と王権を支えた大製鉄鍛治工房であるのは知っていましたが、こんなに広く古代たたらの痕跡が伝えられているとは考えていませんでした。
今回は　もう　午後　4時近くになってきましたので、朝　龍田神社の宮司さんに聞いた御座峰から　龍田大社の磐座を経て降りる古道をあきらめ、雁多尾畑・御座峰から、しっかりしたドライブウエイが続いている信貴山へ久しぶりに行って　そこから三郷町の龍田大社へ下ってきました。
道標もなく、迷路のように枝尾根に果樹園が広がり、集落を離れると人もいない。
里山も馬鹿にするとえらいめに会いそう。

「もう一度　竜田越　今度は「たたら」を意識して　しっかり　竜田越の尾根筋を下からあるこう。
　　また　留所の山にも入って、亀が瀬の地滑り防止地帯の鉄もしっかり見てこよう　」と。

この龍田越と古代鉄の関係については　ほとんど奈良側の三郷町で聞くことが、できませんでしたが、河内側の雁多尾畑の集落では古代の鉄の話を色々聞くことができました。

1. 留所の山周辺・御座峰の山の周辺の畑では時折鉄滓が採取されるという。
   御座峰にもたたら場があったという人もいて、御座峰の碑の周辺を鉄滓が転がっていないか捜しましたが、 よくわからず。
2. 留所の山が地滑りを起こして、亀の瀬側に山の東斜面が崩れ落ちた。この山周辺にあったたたら場も一緒に崩れたらしい。　その崩れた石が亀が瀬の地滑り防止地区の真ん中あたりに積み上げられていて、鉄の塊があるという。
   今回は　時間的にも遅くなったので、後日確認しましたが、たたら場がくずれた石というのはともかく、磁石に引っ付く石もありました。　亀が瀬で石や砂鉄があるのもうなづける。
   また、後日　柏原歴史民俗資料館に電話で亀が瀬の石・鉄滓について問い合わせると
   間違いなく鉄滓や鉄分を含んだ石がある。しかし　鉄滓の年代は少しあたらしいかもしれない。
   また、今の地滑り工事で地下 100㎜ 近くまで、垂直に掘るとその過程で、砂鉄の鉱脈にぶち当たって、鉄を含む石が掘り出されるので、それらも混じっていると聞きました。
3. 「雁多尾畑」のルーツは製鉄集団と何度か聞きました。
   「古代から朝廷に仕えていて、年貢は常に朝廷　明治になっても天皇直属の部下の時代が続き、近衛兵だった。」と。
   「雁多尾畑」は「狩人」つまり「山中深く分け入る人　山中に入って　金属精錬にかかわった人たち」がルーツと。 したがって、集落が麓というより、尾根の上の方にあり、麓との関係が薄いのもこの流れと理解しました。
   また、柏原歴史民俗資料館の話によると雁多尾畑の製鉄集団は大県の後の時代で　大県の集団が谷を遡って、 雁多尾畑に移って行ったのではないか・・・と聞きました。

2007.4.20.　御座峰から信貴山への道を歩きながら

2.4.　帰路　雁多尾畑・御座峰から信貴山へ

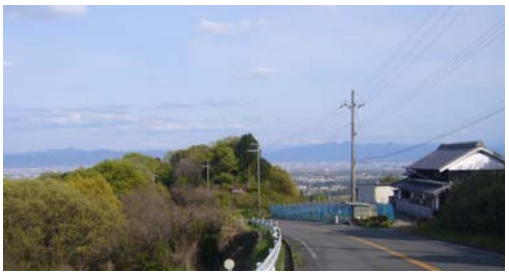
雁多尾畑から大和側の三郷の町へ出る整備された現在の車道は亀の瀬へ下って、大和川沿い対岸を三郷へ出る道とこの尾根の上を北東に信貴山・本堂へ出て、そこから、王寺・三郷へ下る　雁多尾畑集落を南北に貫くのが本道である。 北へ　右手の大和川側の深い谷を眺めながらあるく。随分遠回りで、距離がながい。1 時間以上かかって、信貴山毘沙門天にたどりつく。

この雁多尾畑の集落は大和側の三郷の町とは亀の瀬経由か信貴山経由となり、すぐ下に見えているのに　まっすぐ　三郷の町へ降りる道はなく、話を聞く印象も大和側とはつながっていない。それだけ厳しい山であると理解できる。

2007.4.20.　Mutsu　Nakanishi

御座峰の大和側東斜面の谷間に広がる葡萄畑から信貴山を眺める

信貴山縁起絵巻で有名な信貴山毘沙門天本堂



雁多尾畑から尾根の上を北東の信貴山・本堂へ向かう道で　この深い山中の尾根の上にもぽつぽつ集落がある

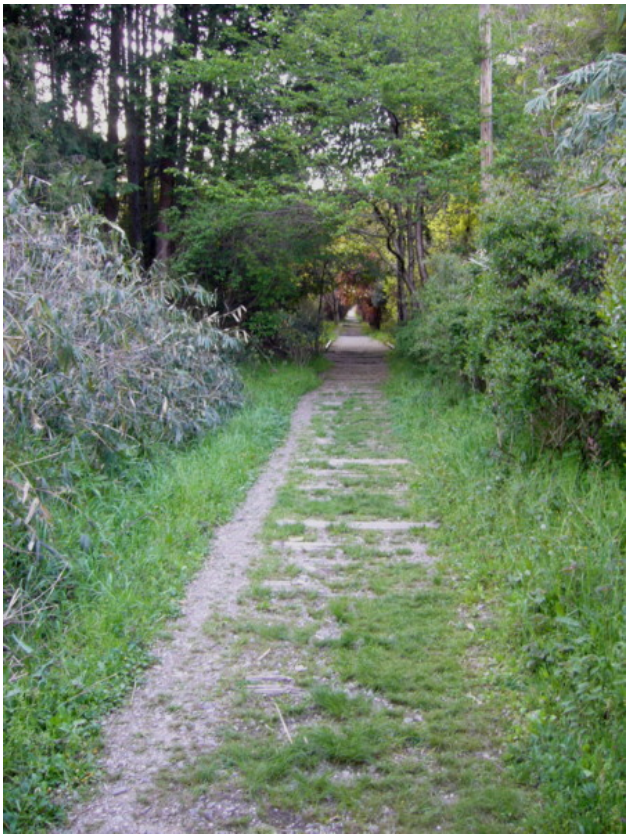
今は広いドライブウエイではあるが、古代からの古い道筋であることがわかる

● 信貴山　毘沙門天

信貴山へ行くのはもう何年ぶりだろうか・・・・

信貴・生駒電鉄に乗って　信貴山下から、長い信貴山ケーブルに乗った記憶がある

信貴山毘沙門天　本堂



旧信貴山ケーブル跡の遊歩道　三郷への下り道

素晴らしい静かな遊歩道になっている

3.　龍田神の道を三室山から御座峰・留所の山へ　　*2007. 4. 29.*

古代たたらの痕跡を捜す

三郷 大和川の土手から見た龍田山左端より 留所の山三室山御座峰 2007. 4. 29.

前回 御座峰から降りることができなかった三室山から三郷・龍田大社への道を逆方向に龍田大社から御座峰・留所の山に登って、留所の山が崩れた亀が瀬の方に下って、雁多尾畑周辺で色々教えてもらった古代たたらの痕跡を探す

1. この龍田大社から三室山を通って御座峰へ至るルートは古代龍田越の本道。御座峰を越えて古代鉄集団の雁多尾畑の集落を河内側へ下って行く。
   かつて、 風神龍田大社はこの道筋の三室山を越えたところにあり、今も数々の磐座が残っている。
2. 御座峰･留所の山を中心に河内側の谷に広がる雁多尾畑はこの谷を吹き上げる風を利用した古代製鉄集団の集落という。
   そして、今も雁多尾畑の畑や留所の山から鉄滓などが見つかり、また地滑りで崩れ落ちた鉄滓が亀の瀬の地滑り地帯で見られるという。
   河内大県の大鍛治工房や雁多尾畑で作られた鉄・鉄器がこの道を越えて大和へ
   この竜田越の道が大和への「和鉄の道」の本道といえるかもしれない

3. 1.　三郷龍田大社から三室山龍田大社元宮・磐座を経て 留所の山・雁多尾畑へ

三室山から龍田大社の元宮・磐座を通って御座峰の古道へ

三郷駅周辺　磐瀬の杜の碑のところから　北へ　高山の市街地を山の方へ抜けたところに三室山から御座峰への登口がある。磐瀬の杜から東へ高山の新しい住宅街を抜けると三室山の展望台までよく整備された遊歩道。
その上もよく手入れされた道が龍田大社本宮・磐座を通って御座峰へ 雑木林の中緩やかな登りが尾根筋につづく。谷へ降りないので、歩きやすい。 上までゆっくり歩いて１時間弱で尾根を登りきれる。
でも　登山口といい　道はよく整備されているのですが、案内板・道標がないのでわかりにくい。
龍田大社の本宮跡・磐座群は丁度この古道の中間点あたりで、急に尾根の西斜面にでて、大和川・三郷の街が中央に見下ろせ、その向うに広がる大和平野が見渡せる。
この景色と対峙できる山の斜面の林の中に小さな磐座がいくつかある。
ここから約１５分ほどで　尾根の上　御座峰の周辺に登りきれる。

三室山への登口近く形が崩れてよくわからないが７世紀前半の方墳が２つ三室山古墳１・２号墳
近くにもう一つ３号墳がある。
この地は大和の入り口　龍田の関がおかれた重要地点　この地を守る豪族が配されていたのだろう

よく整備された遊歩道をぶらぶら 30 分ほどで三室山展望台大和の国が一望

それにしてもコース案内板がなく枝道も多く解りにくいのがたまにキズ

● 龍田古社の磐座群

なだらかな尾根道の雑木林の中を歩いて、三室山展望台を抜けると、龍田本宮跡。

現在は山裾の三郷駅近くの市街地にあるが、元はこの尾根道の三室山を越え多と頃にあった。　この道がかつての龍田社への参道であった。

先日　雁多尾畑から途中まで下った武道畑は　この尾根筋の北西側。　谷筋の厳しい起伏道と比べると雲泥の差。なだらかで　歩きやすい。　この道なら、古代も安心して　雁多尾畑の峠まで登って、河内側へ越えられただろう。

登口から、約 30 分。　よく整備された遊歩道から展望台からは山道となるが、少し尾根をのぼると　斜面の木々が切り開かれて、ぱっと視界が開け、

大和川・大和が一望でき、その斜面に背後の杜につつまれ、眼前の大和の景色と対峙するかのように磐座が点々。

一番手前に龍田大社本宮跡と記されていた。

尾根筋道の南斜面上の龍田本宮跡　周辺

南側には樹木が切り払われ、大和川・三郷の町の向うに大和川が広がっている　2007. 4. 29.

眼前に大和の大パノラマ　尾根筋道の南斜面上の龍田本宮跡

龍田大社本宮跡背後の森に磐座が点々静かな隔絶された空間
神山の厳粛な雰囲気が漂っている　　2007. 4. 29.

龍田大社本宮跡 磐座が点々と続く森を上ってゆく古道静かな神山の厳粛な雰囲気が漂っている

磐座が立ち並ぶ森の中を登りきると道はなだらかになり、空が開ける。もう雁多尾畑の尾根の頂上部に近く、点在するブドウ畑の向こうに電波塔のある留所の山が見え、その方向へなだらかな道が続いている。
雁多尾畑の尾根を桜でうずめる桜の園運動を展開している人たちの植樹地の一つで、せっせと雑草を刈り込んでいる人がいる。 登り始めて、初めて出会う人である。
　先日　雁多尾畑で聞いたこの周辺のたたらの話をベースにこの古道周辺で鉄滓が落ちている場所や御座峰のことなどをたずねる。
「話は聞くが、自分はしらないなあ・・・・。
　雁多尾畑の金山彦神社の宮司さんがそんな鉄の塊保管されていると聞くよ。
　でも　この留所の山周辺と違うかなあ･･･。
　ただ　亀の瀬の地滑り防止対策地の真ん中に岩が集められているが、それは　鉄の岩だよ　」と。
地図を出して、「地図に亀が瀬の鉄の岩の位置を記してもらう。」
なんせ　きっちりしたマップ・道標がないので、人に出会ったときに　きっちり教えてもらわないと解らなくなってしまう。
やっぱり、雁多尾畑の人はみんな　昔　留所の山にたたら場があって、それが地滑りで亀が瀬の方へ崩れたという。

空が開け、電波塔のある留所の山が見えてくるともう尾根の頂上部　　2007. 4. 29.

● 尾根の上留所の山と御座峰の間の雁多尾乗越周辺

北側 御座峰 北東側ブドウ畑の奥に信貴山が見えるすぐ横留所の山への登り道

留所の山の小さなピークの下のところで、東から登ってきた亀が瀬からの車道とぶつかると尾根の頂上部。　北に御座峰がブドウ畑越しにみえ、その向うに信貴山のこんもりした山が見えている。
すぐ横　新しく切り開かれた墓地の横から　留所の山への道が見えているが、東に車道をまず尾根の頂上部　河内と大和の乗越部へゆく。
乗越の十字路の北西の角の石垣に囲まれた上の小さなピークが御座所の峰で、この石垣に登れば、南東の河内側雁多尾畑から登ってきた谷筋から河内平野　そして　葛城・金剛の山並みが一望である。　またこの御座峰・留所の山が北に伸びる生駒山地の南の端でここから大和川亀の瀬に切れ落ちている。

雁多尾畑からの谷の上　十字路の石垣の上に立つとやっぱり　谷を吹き上げてくる風が強い。
風神　龍田の神が降臨したところ　この風はたたらのためには古代必須だったろう。
日本のたたら製鉄でしっかりとしたふいご構造が持ち込まれるのは、8 世紀。　それまで、山や丘の頂上部にあったたたら場が山腹に下りてくる。
鞴がしっかり装着されるまでは　自然の風が製鉄には必須であった。たたらの集団が風神を祭った由縁であろう。
また、平野部からは孤立したこの尾根にかつての雁多尾畑製鉄集団の大集落が今も残り　尾根の上にかつて金山彦・金山媛寮神社が祭られていたとの伝承も
すべて　この風による。
　しばらく、周りを見回しながら　風に吹かれていました。

【尾根の頂上部　河内と大和を結ぶ南北乗越道と東からの峠集落・亀が瀬からの道の十字路】

尾根の乗越手前の道が亀の瀬から登ってきた道

中央の御座峰の下
雁多尾畑から信貴山への道が越えてゆく

乗越から雁多尾畑の集落の中へ下って行く道

● たたら場があったという留所の山　今は雑木が生い茂る金網の中

十字路から亀が瀬への車道を少し戻って、留所の山への小道を南東側へ回り込む。丁度　亀の瀬の地滑り地帯の山の上である。

この留所の山を挟んで、裏側が雁多尾畑の集落で　昔は　この山の中に広場があり、よく遊んだと聞きましたが、今は金網に囲まれ、立ち入り禁止になっていて、雑木が生い茂っている。

金網に沿って、金網の中を覗き込みながら、入り道を探すがなし。金網の中も　少しあるいてみましたが、雑木林の中　雑木・雑草が生い茂り、完全に道は消えている。

金網に沿う狭い小道の反対側は垂直に切れ落ちていて、木々の間から、亀の瀬の地滑り地帯が見え、金網の中の林から下へ地滑り地帯の検知・測定器が組み込まれたパイプだろう。下へ数箇所伸びている。　小道の端で金網が西に曲がって雁多尾畑畑の淵を取り囲み、反対側は地滑り防止地区への垂直に近い急な石段が降りている。

ひょっとしたら、鉄滓があるかもと期待していましたが、だめでした。　階段をおりれば、そのまま地滑り地帯へ降りれますが、御座峰からの昔からの道　峠集落への道から、亀の瀬の地滑り地帯へ入りたくて、もう一度十字路の方へ引き返し、亀の瀬への車道を歩く。

留所の山は東が地滑りで垂直に亀の瀬・大和川へ滑り落ちて急な崖　　2007. 4. 29.

頂上部は地滑り防止対策の景気などがおかれ、柵で中に入れないかつて運動場があったというが
雑木が生い茂り、まったくわからない　　2007. 4. 29.

留所の山の中で鉄滓を拾ったことがあると聞きましたが、まったく捜しようもなし。

● 留所の山の下亀が瀬の地滑り対策地に降り、鉄探し

留所の山の横から亀の瀬へ下る車道　　2007. 4. 29.

亀の瀬への道を地滑り防止地帯へ下って行くと　防止地帯の真ん中あたりにごろごろ鉄滓があるという。
前回は　亀の瀬へ降りるため、この地滑り防止地帯の中心部に入らなかったので、きずかず。
留所の山の横から亀の瀬へ山腹を斜めに下って行く立派な車道を歩く。　道がいいので、苦にはならないだろうが、やっぱり傾斜がきつい。やっぱり随分山の上に上っていたことを感じる。大和川へ落ちる尾根の山腹を斜めに巻きながら地滑り対策地へ降りてゆく。留所の山から垂直に切れ落ち、園土砂で、少し高台となり、さらに下へ崩れ落ちている。　その丁度真ん中の高台のあたりの地滑り帯の縁に出る。峠集落へはそのまま下ってゆくが、高台をトラバースしながら地滑り対策地の真ん中を下る道に入る。
氷河が山を削り取ったカルスト地形とまったくおなじすり鉢状の地形が広がっている。
この地層に 100m もの深さの杭を何本も掘り込み地滑り層をとめ、水抜きパイプも切りめぐらして、その監視網を張り巡らしている。 地滑り防止地区と知らなかったら、素晴らしい草地の景色である。

地滑り地帯から見上げると留所の山からパスッと崩れた様子が良くわかる 2007.4.29.

● 再度 留所の山の地滑り部の縁を頂上部に登って、たたらの痕跡さがして薮こぎ

草地の中　取り囲む留所の山の頂上部の端へ登ってゆく、道が見えたので、　この草地の上から眺めようと車道を歩く。　後ろから来た軽トラから「どこへ行くのだ」との声がかかる。　この道は留所の山の南肩を越えて、狩多尾畑へ入る道だという。
また、「留所の山の端のところから　確か金網の中に道があり、　鉄の塊や大きな石が数個あるところへ行けるはず」と聞いて、再度　挑戦しましたが結局だめでした。

先ほど上から見た留所の山の頂上部まで再度 崩れた縁を登る 2007.4.29.

再度　留所の山の金網の中　歩きましたが　やっぱり　道は消えてなし

地滑りした縁をまっすぐ そのまま登り、頂上部に出て、頂上部を取り囲んだ柵の中に入って、藪の中あちこち歩き回るのですが、つい 数十年前まで 運動場や生活の痕跡があったなど、まったく解らない。ましてや 鉄滓が落ちている場所など論外で、30 分ほど藪のあちこちを歩き回って撤退

● 地滑り防止地帯の中央の石の集合場付近で鉄滓を捜す

再度　地滑り地帯の高台へ戻って、　地図を広げて、朝　教えてもらった岩石が詰まれて置かれている場所を探す。 中段の高台部から、さらに下って行く車道のそばに 2 ケ所ほど　岩石が詰まれた場所が見える。

あんなに‥‥????　これは鉄滓の類ではない。岩石で、たたら場のものではないだろう。

本当なのか 半信半疑でしたが、地滑り防止対策地区にまぎれもなく磁石がひっつく岩がありました。

火山活動の灰と礫が一緒に降りそそいで形成された岩石で均一な石の塊でない礫岩・礫性凝灰岩の類と普通の岩石など　大きく分けると二つの種類。

そのどちらの中にも磁石に引っ付く石がありました。

地滑り防止対策地区に積まれた岩石

但しその素性は良くわからないということのようですが・・・・。

　集落で話を聞いて、　山上のたたら場が落ちた残骸から出た鉄滓がいっしょに見つかること期待していたのですが‥見つかりませんでした。

地滑り防止地区のど真ん中に積み上げられた岩石の山

その中に強くはありませんが、磁石の引っ付く塊が沢山ありました

この対策工事時にこの周辺での岩があつめられたものといわれていますが、地下から掘り出されたものを含め、留所の山が崩れたときに 一緒に山の上から落ちたものという

礫性凝灰岩上の岩　いろんな岩が混入し磁、部分的に石の引っ付く岩がある

普通の石ですが、磁石を近づけるとくっつきました

磁石を近づけると反応して引っ付くもののごく普通の岩石・礫性凝灰岩状の岩いずれも引っ付くものがありました。 この周辺には 鉄の鉱脈があり、今でもこの地滑り防止工事の地中から鉄鉱石が掘り出されることがあり、磁石が引っ付く岩石はそれかもしれません。
この地滑り帯の地滑り面を項制夷するのが、水を透過しない礫性凝灰岩層といわれ、
その面を貫いて穴を開け、楔を造ることが行われており、2 種類の岩があるのはそのため可も知れません。

留所の山の崩れた中央部の下のほうには放置されたままの岩石がゴロゴロ

留所の山の崩れた中央部の下のほうには放置されたまま　ところどころに　ゴロゴロ
留所の山の電波塔から　まっすぐ下へ　帯状に岩石が散らばっていました

積み上げられた岩石のところばかりでなく、下りてゆくと集められず、そのまま放置されている岩石がごろごろありました。
前回この付近を歩いた時には この地滑り防止地帯の中深くは入らず、峠集落から亀の瀬の川に下りてしまったので、気にも留めずに　見過ごしたのですが、雁多尾畑の集落の人に「鉄の塊」だと教えてもらって本当にびっくり。　「鉄の塊」はちょっとオーバーですが･･･
　柏原民俗資料館によると亀の瀬で見つかる岩や鉄滓のルーツははっきりしないところがあり、見つかる鉄滓も意外と年代があたらしいとの見方があるとききました。

この磁石に引っ付く石の塊を見ていずれにせよ この龍田山周辺で製鉄が行われたのは事実なのだと。
こんな山崩れがおきて、　製鉄原料がむき出しになって、それが古代この地で見つかって、谷を吹き抜ける風と都あいまって、製鉄がはじまったのでは　ないだろうか･･･。

瀬戸内海から大和へ入る古代の入り口 大和川・亀の瀬とこの亀の瀬をさける山越えの道を調べるのが、目的でしたが、その古道がそっくりそのまま製鉄集団が歩いた道。

大和への古代の鉄の道 この龍田山で大阪湾から吹き上げる風を利用して鉄を作り、その頂上部周辺に「風の神」「製鉄神」を祭ったのだろうか・・・。 それが、龍田山に残る龍田大社と磐座群 そして雁多尾畑の集落の谷にある金山彦・金山媛神社なのでしょう。
古代のたたら伝承ではいつも　鉄原料がどこか････よくわからないことが多いのですが、ましてや　初期の鉄鉱石精錬ではその鉄鉱石の出所がわからない。　でも　この亀の瀬では　どうも　地滑りにより、崩れた山の中から　鉄鉱石が露出していたのではないか････ その鉄を原料に渡来の製鉄技術集団たちと一緒になって、製鉄自給の試みが　雁多尾畑の尾根のどこかで行われたのではないだろうか・・・・

まったく　根拠のないも妄想かもしれませんが・・・・・・
地すべり地帯のすごさと共に たたらの山の謎が解けたようで、びっくりする展開でした。
やっぱり、でかけてみないと解らない。

古墳時代　初期大和の黎明期　大和への入り口は　紀ノ川・吉野川　大和川　そして　淀川・木津川の 3 ヶ所。
大和に邪馬台国があったとして　卑弥呼が通った道はどこだろうか・・・・・・・・
この　3 ヶ所　の入り口近く　渡来の製鉄集団と関係した大製鉄工房がある。　この道はいずれも「大和と朝鮮半島をつなぐ鉄の道」ではないか・・・・

軽い気持ちで　訪ねた大和川　龍田山・亀の瀬渓谷　地滑り地帯と鉄との関係　本当に　驚きでした。
また　古代人が愛し、何人もが歌に詠んだ紅葉の　「龍田川」は　龍田の森が広がる三郷から亀の瀬あたりまでの　古代の大和川亀瀬渓谷の流れであったこと　また、今も地滑り防止の大工事・地滑りとの戦いが続いていることも知りました。
いままで、電車ですっと通り抜けていた龍田山・亀が瀬渓谷　違った目でみなければ・・・・・

2007.4.29.　Mutsu Nakanishi